

「建学の精神」の源流を旅して



京都産業大学名誉教授 原 正 治

(1) 三輪山と磐座祭祀

奈良盆地のほぼ中央部東側にあつて美しい姿を見せる三輪山、その西麓、纏向（まきむく）一帯は、以前から各種遺構遺物の出土することで注目され、「纏向遺跡」と呼ばれてきた。三輪山の神の奉祭者、倭迹迹日百襲姫（やまとととびももそひめ）の墓と伝える箸墓古墳も近くにあり、最初の本格的な前方後円墳とされるこの箸墓古墳こそ三世紀半ばに没した卑弥呼の墓とする見方も古くからあつた。

三輪山の麓にある大神神社は大物主神（大己貴神、大国主神と同神）を祭神とするが、ここに素朴な施設を営み奉祭したのが始まりであろう。施設は拝殿などに限られ、今日に至るまでこの神社には本殿がない。それは三輪山そのものを神体山として崇拝する、いわゆる神奈備山の信仰が古層にあり、それと重なるように大物主神という人格神が祭られたことを示している。山中には巨石に神の霊が宿るとする磐座信仰があり、大物主神は山頂の奥津磐座とされている。

(2) 「日本書紀」に語られている国作り物語

大神神社が注目されるのは、このような祭祀のあり方もさることながら、祭神の大物主神が出雲の神であり、その由緒に出雲神話の核心が込められているからである。

「日本書紀」によると、少彦名命が常世国に去つたあと、大己貴命が一人で国作りに当たり「荒れていた葦原中国をことごとく自分で治めた。それができるのは私一人だけだ」と自讃したところ、海を照らして浮かびくる者があり、「私がいたからこそ、汝は大きな功績をあげられたのだ」と諷める。そこで大己貴命が「あなたは誰か」と問うたところ、次のように答えたという。「吾は是汝が幸魂・奇魂なり」と。海から来た神は、これら二様の働きをする主体としての大己貴命自身を指しており、独力で国土経営を余儀なくされた大己貴命が、他ならぬ自分自身が一番の協力者であることに気付いたということである。「わかつた。あなたは私の幸魂・奇魂だったのだ。どこに住みたいか」と尋ねる。神はそれに答えて「自分は三諸山に住みたいと思う」と。そこで大己貴命はその神を大和

の三諸山に宮殿を作って住ませた。これが三輪山の神であると述べる。

以上より、大和朝廷が国内統一の大前提とした「国譲り」を説明するためには、大国主神による「国作り」を述べておくことが不可欠の手續きだったことがわかる。そうであれば、出雲と大和の間に「磐座祭祀」の連鎖の痕跡が見出されるにちがいない。

(3) 磐船神社（河内）と籠神社（丹後）

大和から河内へ抜ける磐船街道の名は、この道に沿って存在する磐船神社に由来するが、ここには典型的な磐座祭祀の姿が見られる。巨大な磐座は、船首をあげて進む船の形と見て、これを、饒速日命が高天原から乗ってきて大和に降ったという「天磐船」に擬して祭るようになったのである。一方、籠神社に伝えられてきた「勘注系図」によると、祭神、彦火明命は、籠神社の祝部であり丹後国造でもあった海部氏の始祖であり、天磐船に乗り丹後で空に上がって河内に降り、その後、大和国鳥見白辻山に遷って登美彦の妹、登美姫を娶り可美真手命（うましまでのみこと・物部氏祖神）を生んだとする。その類似から、「彦火明命」と「饒速日命」とは同一神とみなされたのである。それでは、籠神社にも磐座があったのか気になるところであるが、奥宮の真名井神社の境内に磐座（主座・西座）があった。問題はそれがなぜ出雲と関わりがあるのかである。

(4) 上賀茂神社（山城）と高鴨神社（大和葛城）

籠神社の社伝によれば、海部氏には秘伝として、彦火明命は上賀茂神社の祭神・賀茂別雷神と異名同神である、と代々伝えられてきたという。葛城の高鴨神社の祭神が大国主神の子、阿遲須积高日子根命（あじすきたかひこねのみこと）という、正統な出雲系の神であったことを考えれば、上賀茂神社の祭神・別雷神も本来は出雲系の神であったことになる。こうして、籠神社の記録を仲立ちとして、大和／大神神社・葛城／高鴨神社・河内／磐船神社・山城／上賀茂神社・丹後／籠神社と、出雲系の神々を奉祭する神社の繋がりが明らかになった。

(5) 出雲の磐座祭祀とその背後にあるもの

1984年から85年にかけて、出雲郡斐川町の神庭荒神谷から銅剣358本、銅鐸6個、銅矛16本が一括出土した。次いで、1996年には大原郡加茂町の加茂岩倉から、39個もの銅鐸が一括出土した。全て弥生期のものである。そして、両遺跡に共通する神奈備山が仏経山であり、その山頂には磐座が存在し、麓には出雲国造の祖・伎比佐加美高日子命（きひさかみたかひこのみこと）が出雲大神を奉祭する曾根能夜神社（そぎのやじんじゃ）がある。のちに杵築に移るまでの間、出雲大神の魂はこの山上にあり、国造の祖によって奉祭されてきたのである。

以上より、磐座祭祀の場所はいずれも鉱山開発と深い関わりがあることに気付く。大和の場合、三輪山の麓には「金屋」「穴師」などの地名が残るように製鉄が行われていた形跡があり、御所市にある「葛城御歳神社」は背後の山に磐座を祭るが、ここにも鉱脈があり、先の高鴨神社の神域も鉱脈の上にある。製銅・製鉄が「国作り」の中核を占めていたことからすれば、出雲系の神と磐座祭祀＝信仰との関係は根源的なものであったといえよう。

(6) 結びに代えて——出雲大社とは何か

「古事記」によると、高天原を追われたスサノオは、肥の河上の鳥髪という地に降り立たとされる。この時、上流より流れ来た箸を見て、川上には人が住んでいると考え、さらに遡って行った結果、イナダ姫と出会うことができた。スサノオはどこを歩いたか、川筋を歩いている。二つの世界を結ぶもの、それが「川を流れて来る箸」として言い表わされていることは重要である。

出雲大社の階段の下を浜床（はまゆか）という。昔はそこに神門水海（かんどのみずうみ）があった。したがって、復元図の長大な梯子は川の象徴と考えられる。そして、社殿は山、それは神奈備山であり、磐座そのものでもある。すなわち、山、川、海という自然世界そのものを一つの循環として具現したのが、出雲大社なのである。神庭荒神谷、加茂岩倉、どうしてあのような場所から青銅器が見つかったのか。そこが神の通り道だったからである。

地球環境破壊が急激に進行しつつある現在、出雲大社は極めて重要な情報を我々に発信してくれている。それは、現代の「結びわざ」とは何なのかを、常に我々に問い続けているという意味において、そうなのである。

参考文献

- (1) 「風土記の考古学」3 出雲国風土記の巻、山本 清編、同成社、1995年
- (2) 「古代出雲の文化」上田正昭・島根県古代文化センター編、朝日新聞社、1998年
- (3) 「古代海部氏の系図」金久与一著、学生社、1999年
- (4) 「古代出雲」門脇禎二著、講談社学術文庫、2003年
- (5) 「三輪山の古代史」平林章仁著、白水社、2000年
- (6) 「出雲大社」千家尊統著、学生社、2000年
- (7) 「伊勢神宮」上山春平編、人文書院、1993年